

蝶の博物詩

生態41

季節型(1)



ベニシジミ 春型
(1994年5月29日 野尻湖)

photo by

Nishiyama



ベニシジミ 夏型
(2001年8月24日 野尻湖)

蝶の博物詩

生態41

季節型(1)

季節型とは聞きなれない言葉であるが、インフルエンザとは関係がない。大辞泉には“同一種の動物が季節によって示す、形態や色彩の変異の型”とある。この定義にしたがえば、夏と冬で翅の色が異なるライチョウの状態も季節型といえる。一方、昆虫の世界では、1年間に2回またはそれ以上の世代を繰り返す際、季節によって成虫の形態(大きさ、色彩)の違う状態を、春型、夏型、秋型と呼んでいる。ライチョウの翅の色の変化は一世代の中での出来事であるために、“季節変異”といって区別する立場をとっている。

季節型は四季の明瞭なわが国の、とくに本州、四国、九州に生息する蝶で顕著であり、八重山諸島のように、1年中温暖な地では季節型は現れない。1年で何回世代を繰り返しても(多化性)、同じ形態や色彩の個体しかみられない。また熱帯では乾季型、雨季型という変異があるそうだが、みたことがない。春、夏、秋の3型がある地方では、四季折々の変化を楽しむことができるので幸せである。

春型の蝶は多くは蛹で、一部は幼虫のまま越冬したもので、いわば去年の蝶である。当然ながら、春型の蝶の卵に由来するものが夏型である。春型と夏型とで比較した場合、まったく別の種類であるようにみえるものがある。ここにあげたベニシジミやサカハチチョウ、アカマダラがその好例である。一般に春型のほうが小型なのは幼虫時代の食物(食草)が前年秋のほうが少ないので当然かもしれない。ナミアゲハ、キアゲハ、カラスアゲハ、ミヤマカラスアゲハなどアゲハチョウの仲間の春型は小さくて可愛らしい。翅の色調で比較すると、ベニシジミの夏型の色が黒いのは特徴的であり、キアゲハ、ナミアゲハでも黒の部分が多くなっている。またミヤマカラスアゲハでは翅の外縁近くにみられる黄緑色の帯状の模様が春型ではより顕著で美しい。女性の間で美しい蝶のランキング1位にあげられるのはこのミヤマカラスアゲハ(本誌18巻7号)であろうが、私はなかならず、北海道産、春型の雄を推したい。

アゲハ類のほか、春先にいち早く現れるベニシジミも夏型のほうが大きい。ここでも小型で明るい色調の春型のほうが好まれる傾向がある。これに対して、幼虫で越冬し、初夏に蛹となって羽化するゴマダラチョウやキマダラセセリ、ヒメウラナミジャノメなどははるかに春型のほうが大きい。またゴマダラチョウの春型の裏面はかなり白っぽくなり、別の種類の蝶と間違えられることもある。ごくありふれたモンシロチョウでも手にとって観察すると、黒い斑点が春、夏少しずつ異なるなど、日本の蝶は変化に富んでいて興味深い。

西山茂夫